令和６年度探究的な学びを中核とした「学びの変革」カリキュラム研究開発事業

先導的モデル地域：呉市立天応学園

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
呉市立天応学園　前期課程	９	193人
呉市立天応学園　後期課程	４	76人

（R6.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ

自他の知をつなげ、粘り強く学ぶ児童生徒の育成
～対話・探究・貢献を軸とした授業づくりを通して～

（２）特色

探究　×　情報

【本校における「情報」の捉え】
いわゆる情報リテラシーや情報モラル等の情報教育という意味合いではなく、それらはもちろん、調査した事柄や他者の話から得た情報、自分自身の知識や経験、感覚といったものも含めた広い意味での「情報」である。それらの「情報」を活用しながら探究活動を進めていくというイメージである。

（３）系統的に育成を目指す資質・能力

【知識及び技能】情報収集力：
事象に対して自らの諸感覚を通して質感としての情報を得たり、問いに対して図書やデジタル機器等により適切な文字や数値等としての情報を得たりする力

【思考力、判断力、表現力等】情報活用力及び批判的思考力：
既有の経験や知識、吟味を経た新たな情報を基に、目的実現に向けて批判的に思考する力

【学びに向かう力、人間性等】協働性及び挑戦心：
自他を尊重し対話により学び合い、自分自身を励ましながら粘り強く挑戦を続ける態度

（４）研究内容の概要

【探究的な学びを中核にしたカリキュラム開発の視点】
・教育課程の全体像を俯瞰するカリキュラムマップを作成し、教科や学年を超えて学校全体で実践・改善しながら、児童生徒の資質・能力の育成につなげる。

【ＰＢＬの考え方を取り入れた総合的な学習の時間の単元開発の視点】
・昨年度までの「防災」や「生き方」に係る二本柱のカリキュラムを基に、各学年の児童生徒実態等に応じて新単元の開発に取り組む。
・本校の特色や強みを生かしたり、教科横断的かつ往還的な活動を仕組んだりして、児童生徒が自分事として学ぶことができる単元づくりを進める。

２　実践事例

○今年度の単元開発・授業づくりの主な動向

【ポイント】①研究推進体制の機能化と校内研修の工夫
②子ども教師ともにわくわくするような単元開発
③呉版単元構想シートの活用（適宜更新）

４月　研究推進体制の確立、理論研修、前年度の学習についての引継会、探究のテーマ案を考える（各学年担当者）
５月　単元づくりの構想に係る連携（各学年担当者ー研究推進リーダー・研究担当教員）
探究のテーマや探究課題について綿密な打ち合わせ、構想練り上げの末、総合的な学習の時間の授業をスタート
６月　単元づくりに係る連携・相談（各学年担当者ー指導主事）
８月　単元づくり・授業実践に関する中間報告会
10月　研究授業（９学年　総合的な学習の時間）
11月　研究授業（５学年　総合的な学習の時間）
12月　単元づくりについてのまとめ資料の作成（各学年担当者）
１月　単元づくり・授業実践に関する実践報告会

今年度の総合的な学習の時間の単元開発・授業づくりの実践に向けて、校内で研究推進リーダーを中心とした研究推進体制を整えるとともに、各学年に総合的な学習の時間の担当者を置いた。

４月の職員研修では、全職員が共通認識をもてるよう、これまでの研究を振り返るとともに、前年度の各学年の単元について知る機会を設けた。５月には、研究推進リーダーと各学年の担当者が単元開発に向けた探究のテーマや探究課題の案を持ち寄り、それらの魅力や広がり、課題との出合わせ方や葛藤場面の想定等を徹底的に吟味する場を設け、検討を重ねながら単元構想を練っていった。その際大切にしたのが、児童生徒の実態や興味・関心、児童の成長に寄せる指導者の思いや願いである。それらを大切に、本校の総合的な学習の時間の２本柱であった「防災」、「生き方」のテーマに囚われない自由な発想での単元作りを進めていった。

単元のテーマが決まってからは、呉版単元構想シートを活用し単元構想を可視化して、今年度の総合的な学習の時間の授業をスタートさせた。単元開始以降も、呉版単元構想シートを適宜更新・活用しながら、単元づくりを進めていった。

職員研修では、８月に中間報告会、１月に実践報告会をもち、各学年の総合的な学習の時間の単元作りについて交流するとともに、成果や課題を全職員で共有できるよう工夫した。

○５学年　総合的な学習の時間　「食品ロスを減らせ！～地域に届け 命をつなぐ未来プロジェクト～」　【ＳＤＧｓ】

【ポイント】①児童実態をもとに、指導者側の思いを踏まえた単元（探究課題）の設定
②教科横断的かつ往還的な学習
③地域人材の活用による本物との出会い

５学年は、給食の残菜量が多いという児童実態を踏まえ、「食」について考える学習ができないかと考えた。そこで、教員側からきっかけを与え、児童の「『食』について考えたい。」という課題意識をもたせる工夫を最初の授業で行った。具体的には、「命懸けの行列」の動画（国連WFP協会）や「まだ食べられるのに捨てられる食材」の写真の提示である。この授業を経て、児童は「食品ロス」について考えたいという意欲をもった。

探究の過程では、教科横断的な学習を大切に、指導者が探究活動の流れや児童の思考の状況を汲み取り、教科指導において内容配列を入れ替えたり、関連内容に比重を置いた授業をしたりと、カリキュラム・マネジメントを行いながら、単元の学習を進め、児童の探究心を深める工夫を行った。

また、食品ロスを減らす取組を行っている地域の方をゲストティーチャーに招き、未利用食材を使った調理実習や農業体験を児童自身が行った。取組をされている方の思いに触れるとともに、実際に「作る・食べる・獲る」体験を通して、児童の考えや思い

がより強くなった。本物との出会いが、「食品ロスを減らすために自分たちも何か取り組みたい。」という強い意識を生み、「地域に届け 命をつなぐ未来プロジェクト」を立ち上げるに至り、食品ロスを減らすことをコンセプトに作成したオリジナルレシピ集を地域へ発信する活動を行った。

○８学年　総合的な学習の時間　「職場体験をレベルアップ！」【生き方】

【ポイント】①前学年の学びからの単元（探究課題）設定
②失敗体験（計画の断念、方向転換）
③自校の特性を生かした取組（ワンモア職場体験）

８学年は、７学年時に学習した単元「It’s my life. ～自分史作りを通して～」の中で出された、「働くこと」についてもっと考えたいという生徒の課題意識から単元を設定した。働く人の思いや考えを調査することから始め、自身の価値観や考えを深めた上で、課題意識をもって職場体験に臨むことができた。職場体験前に生徒が考えていた「事業所ＰＲ大作戦」は、体験期間中に得た情報では足りず、実施困難と生徒自身が判断し断念した。代わりに、職場体験で残った自分たちの課題を解決するために、「もう一度職場体験をしたい。」という思いを抱いた。そこでワンモア職場体験として、本校の特性を生かした活動、リトルティーチャー（教員体験：３年児童への授業）を設定した。指導案や教具作り、模擬授業を経て本番の授業を行うといった、教員の仕事を追体験した。一連の学習を通して、仕事に関する価値観や考えが変化したり、職業選択を含めた将来の生き方について考えたりしていた。

○９学年　総合的な学習の時間　「ためにならんワケないじゃん！～防災フェス開催～」　【防災】

【ポイント】①これまでの学習からの単元（探究課題）の設定
②外部人材や他学年との連携・協働
③地域を巻き込んだイベントの開催

９学年は、これまでの防災に係る学習の集大成として、「災害に強いまちづくりに貢献したい。」という生徒の思いから、単元を設定した。生徒は学習の中で、小さい子どもからお年寄りまで、幅広い世代の人に防災意識をもってもらうためのイベント、「防災フェス」の開催を企画・立案した。その開催に向け、目的（「防災知識を深める」、「防災意識を高める」、「地域の絆を深める」）を明確にするとともに、実行委員会を立ち上げ、役割分担をして作業や準備に取り組んだ。各ブースのもち方や内容について、呉工業高等専門学校の教授と学生から意見をもらったり、協働したりしながら検討を繰り返した。また、総合的な学習の時間で同じく防災に係る学習をしている４・６・７学年の児童生徒や地域のボランティア団体「つなごう@天応」さんにも趣旨を説明し、ブースの出展を呼びかけ、学校全体・地域を巻き込んだイベントへと拡大させた。当日は、多くの方にご参加をいただき、各ブースとも大盛況であった。事後学習では、参加者のアンケート結果から成果や課題を整理した。

○カリキュラム・マネジメント（教科横断的・往還的な視点）

【ポイント】①年間指導計画を俯瞰的に見ること。
②教科横断的・往還的な視点をもつこと。

カリキュラム・マネジメントの一つとして、年間を通して各学年の年間指導計画を適宜更新することに取り組んだ。具体的には、年間指導計画を俯瞰して見て、総合的な学習の時間と関連のある教科の単元等のチェックや必要に応じた内容配列の変更、関連内容に比重を置いた指導等を柔軟に行い、総合的な学習の時間と教科の学習が結び付くよう意識して取り組んだ。

○来年度の計画立案・単元づくりに向けた校内研修

【ポイント】①今年度の反省を踏まえた取組
②接続学年間の連携（単元、児童生徒実態）
③児童生徒実態等に基づいた探究テーマの設定

今年度の反省の一つとして、総合的な学習の時間の探究テーマの設定に自由度をもたせ、担当者間の連携に力を入れた分、テーマの決定に時間を要し授業のスタートが５月末にずれ込んでしまったことが挙げられた。そこで、来年度の探究のテーマについては、今年度中に方向性を決めておくことにした。今年度同様、来年度の各学年の探究のテーマも、「児童生徒の実態や興味・関心を大事に設定したい。」という思いから、接続学年の担当者を中心に当該学年の児童生徒実態や興味・関心、今年度の単元の学習内容等を交流し合い、来年度はどんなテーマで単元を設定し学習を進めるべきかを話し合う職員研修の場を設けた。この過程を経ることで、今年度と同等の自由度を保ちながら、来年度の単元づくりの方向性を早めに考えることができた。

３　研究の成果と課題等

観点別	情報収集力	情報活用力及び批判的思考力	協働性及び挑戦心
６月	87.9%	88.0%	88.9%
１月	92.9%	89.0%	88.1%
差	+5.0	+1.0	−0.8

（令和６年度総合的な学習の時間に係る３～９学年児童・生徒アンケート：観点別の質問に対する肯定的評価のまとめ）

（１）成果

・上の表のうち、「情報収集力」に係る質問の肯定的回答の伸びが+5.0と大きかった。これは、児童生徒の興味・関心に基づいた単元のテーマ設定をしたことで、自分事として探究課題に向き合い、意欲的に学習を進めてきた結果であると考えられる。また、本校のメディアセンターの活用やＩＣＴの活用、地域人材の積極的活用等、多様な情報収集の手段を各学年の学習の中で設定できたことも効果的であったと思われる。
・３～９学年のすべての学年において新しい単元を１本ずつ、全体として計７本の単元を開発することができた。

（２）課題

・上の表のうち、「協働性及び挑戦心」に係る質問の肯定的回答は-0.8となった。中でも、「将来の夢や目標をもっています」の項目の肯定的回答が-4.8%（６月：87.1%、１月：82.3%）と、最も下げ幅が大きかった。学年別に見ても、９学年以外は全て６月よりも下がる結果であった。
・総合的な学習の時間の担当者とそうでない教職員とで、本指定事業への意識に差があり、各自が自分事の研究となっていない。

（３）今後の改善方策等

・地域人材の積極的な活用を継続するとともに、探究のテーマに関わらず、児童生徒がその人の生き方や思いに触れられるよう工夫し、自己の将来や生き方について考えるきっかけを作る。
・研究に係る校内体制やTT指導の在り方、校内研修のもち方等を見直し、全教職員が自分事として研究に取り組めるようにする。